

広陵町教育委員会だより

令和8年度 10月号 10月9日発行

広陵町教育委員会
北葛城郡広陵町笠161番地2

TEL0745-43-6180 文責・編集 植村



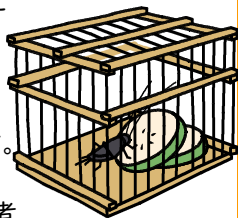
我が衣 にほひぬべくも 味酒(うまさけ)の
三諸(みもろ)の山は 黄葉(もみち)しにけり

万葉集 巻7-1094 柿本人麻呂歌集

私の衣が美しく染まってしまうほどに三輪の山は見事に紅葉している

「カスタマーハラスメント防止指針」を踏まえて！

10月に入り、ようやく暑さも和らぎ、朝夕は幾分か涼しくなってきました。また、夕刻には、家々の庭や草むらから、耳に快い「コロコロリー、コロコロリー」とエンマコオロギや「チンチロリン」とマツムシなどの秋に鳴く虫の声が聞こえ、秋を感じる季節になってきました。また、田んぼに目を移せば黄金色に色づいた稲穂が秋風になびいて、今が刈り入れ時と言わんばかりの雰囲気を感じさせています。



ところで、令和8年10月1日から「カスタマーハラスメント」防止措置が学校設置者を含む事業主の義務となりました。厚生労働省の「カスタマーハラスメント防止指針」を踏まえ、文部科学省は、保護者等の社会通念上許容される範囲を超えた言動への対応指針として「学校と保護者・地域住民等とのより良い関係構築のためのガイドライン」を作成し、県・市町村教育委員会・各学校に周知されました。

広陵町教育委員会では、このことを受けて9月28日(月)に各小中学校から保護者宛にメール等を通じて、文部科学省から出された、「保護者・地域住民の皆様へ 学校とのより良い関係構築にご協力ください」というチラシを配信していただきました。そのチラシには、「社会通念上許容される範囲を超えた言動とは」という見出しがあり、その説明として、「保護者や地域住民等から寄せられる相談や要望の中には、学校だけでは対応が困難で、教職員の就業環境が害されるような社会通念上許容される範囲を超えた過剰な要求や苦情などもあります。こうした『社会通念上許容される範囲を超えた言動』に対して、学校設置者は措置を講ずる必要があります。」と書かれていて、その例として、

- ・そもそも要求に理由がない又は学校における教育活動と全く関係のない要求
- ・学校の教育活動及び学校運営の範囲を著しく超える対応を求めるもの
- ・身体的な攻撃(暴行、傷害等)
- ・精神的な攻撃(脅迫、中傷、名誉毀損、侮辱、暴言、土下座の強要等)
- ・対応が著しく困難な又は対応が不可能な要求
- ・相当性を欠く賠償要求
- ・威圧的な言動
- ・継続的、執拗な言動
- ・拘束的な言動

が書かれています。そして、お願い事として、「学校と保護者や地域住民等は、いずれも児童生徒等一人一人の健やかな成長を支える共通の立場にあるパ



ートナーで、保護者や地域住民の皆様は、学校とのより良い関係構築への協力をお願いします。」とも書かれています。

保護者や住民の皆様には、このようなハラスメントの対応なんて必要ないのは分かっているのですが、私もかつて教員や校長時代にかなりの無理難題を言われて頭を抱えて悩んだ日々がありました。そういう意味では、このような指針ができたことで、教育委員会が学校現場を守る応援団として、これからもサポートしていけたらと思います。

教育委員会の取組

第3回広陵町教育の日を開催しました！

9月16日(水)の午後から、3回目となる「広陵町教育の日」として、公開授業を中心とした町の指定研究会を広陵中学校で開催しました。私は、常に言っていることですが、「教師の仕事の第一義は授業だ。」と思っています。また、「教師は授業で勝負する。」ということもよく言われます。広陵中学校の先生方には、1学年から3学年までのそれぞれ2クラスと特別支援学級の7つの公開授業をしていただきました。

広陵中学校は、今年度と来年度の2年間、文部科学省の教育課程柔軟化サキドリ研究校事業の指定を受けて、年間授業数を柔軟に再配分することで、職員研修の時間30時間と「広陵探究」の時間30時間を捻出した取組を始めてもらっています。

この日も、幼保小の連携を進めている「架け橋推進委員」の先生方や幼稚園・こども園から6名の先生方、小中学校合わせて177名の先生方、そして教育委員3名を含む事務局10名、県教育委員会2名の合計、196名の参加がありました。受付では、昨年も参観者にお渡しした「授業参観の7つのポイント」を渡し、参観の参考にしてもらいました。

公開授業は午後1時35分から始まり、3名の教育委員さんとともに1年生の授業から順に参観させていただきました。それぞれの教室や廊下では20~30人の先生方が熱心に授業を参観されていました。

1年3組の「広陵探究」では、吉野川分水をめぐる奈良県と和歌山県の対立についての授業で、奈良県、和歌山県、当時の政府が何度も話し合いを重ねて吉野川分水が実現し、現在の広陵町もこの水で生活を支えてもらっていることを理解する授業でした。

その他、1年2組の国語では、「大人になれなかった弟たちに……」(米倉斉加年作)の授業、2年6組の「広陵探究」では、「広陵町で減災を行うことは可能だろうか」という授業、2年2組は、数学の「2元1次方程式 $3x+2y=6$ のグラフってどんなグラフ?」という授業、3年2組の「広陵探究」では、「広陵町の課題を見つけよう!」と自然環境や人口、産業、交通などの課題



裏面へ

を出し合う授業、3年5組の保健体育では、バレーボールにおいて、チームで協力しながらパスをつないで攻撃できるようになることを目標にした授業、そして、特別支援学級の理科（自立活動）では、「夏野菜の成長記録を伝えよう」という題材で、これまで進めてきた野菜の成長記録を写真やスライドなど視覚的なものを用いて発表するという授業でした。

その後、研究協議が行われる前に私のあいさつがあり、各教室のテレビを通じてオンラインで、参加された先生方へのお礼とともに、「私は授業参観だけでは、本当の研修にならないと思っています。研究協議に参加することで、授業者の学習内容の工夫やその想いを聴くこと、そして、参観者から見た授業展開等についての想いや改善点など、様々な観点での意見交流をすることで、今後の授業に活かされるものと思っています。」という話をさせていただきました。研究協議では、ほぼ公開された教室で開かれ、はじめに授業をされた先生方が授業におけるねらいや工夫、授業をした後の反省などを話されました。その後、参加者一人一人から授業の感想や授業に対する質疑応答、そして意見交流という形で進みました。



どこの分科会場でも、授業提供をしてもらった先生と参観された先生方との活発で熱心な意見交流がなされ、しかも今回は中学校の授業ということもあり、小学校や園の先生方がそれぞれ違う立場で、感じた素直な思いや様々な意見交流等がなされていました。主催者として本当にうれしく思うとともに、校種を越えた交流をしてもらったことに感謝の思いで一杯でした。ある小学校の先生から、「他校の小学校の先生や中学校の先生と意見交流できて充実した時間でした。中学校の授業を参観する機会は全くないのでとても勉強になりました。」やある園長先生からは、「幼小中の先生方が集まって広陵町の子どもをどう育てるか、主体性をどう伸ばすか、生きる力をどうつけるかなど、議論できることがすばらしい。」という思いがけない感想もいただきました。これからも先生方の授業力向上のために教育委員会としても続けていきたいと思いました。

車いすダンス公演を開催しました！

9月15日(火)、町内の全小学校の6年生を対象に、かぐや姫ホールにおいて、大阪にあるジェネシスオブエンターテイメントによる車いすダンス公演を開催しました。これは、文化庁の「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業の学校・地域社会連携型公演」として、町教委が文化庁に申請して認められた事業です。車いすに乗ったダンサーと健常者のダンサーが同じ舞台上でダンスするのが特徴で、障がいの有無にかかわらず誰もが「共に生きる」ことをテーマに掲げています。この日は、クラシックやバラード、ロックなどの曲に合わせて、優雅で華麗に、時には力強いダンス姿に、会場内のすべての子どもたちは大いに魅了され、自然と拍手が起こると同時に大きな歓声に包まれました。



ダンスの中盤には、理事長の坪田さんから活動内容とメンバーの紹介があり、車いすダンスの美咲さん、安藤さん、フリーダンサーのももさん、かえでさん、ふうたさんが個々に華麗なダンスを披露していただきました。また、12名の子どもたちに対して、車いすに乗る人と乗らない人に別れての車いすダンス体験もしていただき、車いすを扱うことの難しさやペアで演技することの楽しさを体験して、子どもたちは大いに盛り上がっていました。



その後、美咲さんと安藤さんの生まれつきの障がいから車いす生活を余儀なくされ、車いすダンスに至った経緯を話していただきました。美咲さんは、様々な人に支えられ、今の自分があること、そして、「みんな違っていい、違うからこそ一緒にいる意味がある。」と一人一人の個性を認め合うことの大切さと呼びかけてくれました。安藤さんは、車いす生活でいじめを受け、中学校2年生の時にはそのいじめから逃れるため、死のうとして行き来する車の前に飛び出したが数cm手前で車が止まり命拾いしたこと、それ以後自分のことを親身になってくれる友だちができて、その友だちによって今の自分がある、また、6年前に脳梗塞を患い、今もリハビリを続けながら、再び車いすダンスの世界に戻ってきた経緯から、「みなさんも負けないもの見つけて、決して諦めないでがんばってほしい。」という熱いメッセージを贈ってもらいました。子どもたちは、お互いの違いを理解し、尊重しながら「共に生きる」ことについて深く考えるとてもいい機会になりました。



真美ヶ丘第一小学校

グローバルマインドの育成！

今年重点目標の一つとして「グローバルな視点」において、全校で取り組む「世界とつながる真美一プロジェクト」を始動しました。世界の現状を「自分ごと」にする第一歩として、地域とともに世界に視野を広げ、「想いを行動へ」、そしてその行動を確かな形にするために取り組んでいます。

その一つとして、広陵町の特産品である「靴下」を通じた平和・国際理解の取組を今年度より行い、「世界とつながる真美一プロジェクト」の一環として、世界で教育支援活動を行っておられるなかよし学園の中村さんをゲストティーチャーとして招き、世界の紛争地域における現状を子どもたちに伝えてもらいました。子どもたちが「自分たちで考え行動することで、誰でも平和をつくることができる」というメッセージをもらい、一人ひとりが世界に目を向け、深く考える契機となりました。

今回、5年生と6年生が作成してくれた靴下とペットボトルホルダーは、先月、アフリカのルワンダの子どもたちに届けてもらい現地の子どもたちが早速、履いてくれていました。

